

インフルエンザ等、感染症の流行が心配です。ご家庭でも感染症対策にご配慮ください。お願いします。

デジタルの学び

教室をのぞいてみると、何やら真剣にタブレットと向き合っている子どもたち。どうやら、テストの最中のような様子。熊本市では、C B T (Computer Based Testing) 試験を一部採用しており、榎木小学校でも高学年では算数などのテストにC B T 試験方式を取り入れています。おっと、テストが終わったようですが、一瞬で子どもたちへのフィードバック (いわゆる丸付け→返却) が行われています。

「あ〜ここが間違ったのか…」 「答え、こうなるんだね。やり直しをしよう」

すぐさまフィードバックがあることも、C B T 試験のよさです。これまでの紙のテストは、先生が集め、採点し、分析し、そして子どもたちへ返却し、振り返りをする。と、どうしても振り返りまでにタイムラグが必要でした。このタイムラグ、時間をおいて振り返るというよさがあるので、一概によくないと断罪はできません。が、すぐにフィードバックができるメリットは効果絶大。思考が新鮮なので、自身の学びを自分で「みている」実感があります。

さらに、C B T 試験はデジタルなので記録の蓄積ができ、時空を超えて自分自身の学びを見つめ直すことができます。加えて、生成A I 等、汎用性のあるA I の登場により、子どもたちの学びを取り巻く環境は大きな転換期を迎えています。

一方では、デジタルの進化によって暗い影が見られる場面も少なくない。端末依存やS N S等を通じたヘイトに炎上、フェイクニュースの蔓延などあげていくときりがない。

デジタルの進化を含め、テクノロジーは現代の「黒船」なのか？

文部科学省初等中等教育局の寺島史朗氏は、あるインタビューの中で、むしろテクノロジーは教育を支える「渡りに船」ではないかと、次のように述べられています。

生成A I のようなテクノロジーは「黒船」のように、教育を根底から一変させるものとして語られがちです。しかし私は、むしろ「渡りに船」だと捉えていて、生成A I などのテクノロジーが入ってきて、先生方の「これまでやりたかったこと」が変わるわけではないと考えています。

なるほど。ノートや鉛筆のように、文房具としての位置づけを目指すテクノロジー。余談ですが、ノートや鉛筆が教育に導入された黎明期 (おおよそ明治文明開化の時) にも、同じようにノートや鉛筆に”依存“してしまうことが問題になった、という記録が残っているそうです。今となっては、なぜそんなことが問題になったのか想像することも難しいのですが、新しいものが導入される時には、このようなアレルギーに近い拒否反応が生まれるのもわかる気がします。

だからと言って、目の前のタブレット端末などのテクノロジーは、ノートや鉛筆のように簡単には文房具として使いこなすことは難しいと、私は思うのです。便利で手軽、表現力も高めてくれる相棒的な存在になりうる半面、射幸性の高さに代表されるように、全能感をもたらすとともに依存や危険なつながりをも生み出してしまふ・・・

上手に使いこなすためには、まだまだ議論の余地がありますね。まずはルール作りが必須。ご家庭でも、この学年末の機会に ICT 機器の使い方などについても振り返っていただけると幸いです。

